

2017.12
(公社)富山県薬剤師会
広報誌

とみ やく 富 薬

12号

第39巻

No.341



ホソバセンナ *Cassia angustifolia* Vahl (マメ科 Leguminosae)

生薬 センナ 開花最盛期を過ぎた頃、葉を摘み取り、陰干しする。弱においがあり、味は苦い。緑色で葉柄が少ないものが良品。

成分 ジアンスロン類：sennosideA, B, C, D、アントラキノン類：rhein,aloe-emodin,chrysophanol およびそれらの配糖体、フラボノイド：kaempferol、ナフトレン類：tinnevellin glucoside 等。

効能 緩下薬。配合薬原料。

生薬 ホソバセンナ

元富山県薬事研究所
薬用植物指導センター

村上守一氏 写真撮影

〇〇表紙について〇〇



属名 *Cassia* はケイの学名 *Cinnamomum cassia* から誤って転用されたもので、ヘブライ語 *gasta* (シナモンに似た樹皮) に由来しています。ギリシア語で *kassia* (シナモン性のスパイス) となり、ラテン語で *cassia* になったと考えられています。1865年に *Cassia* 約340種ほどがまとめられ、3亜属に分類されました。薬学分野の日本薬局方がこの分類を踏襲していますが、植物学分野では *Cassia* が500種もの大きな属になっていたこともあり、1978年に3亜属をそれぞれ独立させ、*Cassia* (ナンバンサイカチ属)、*Chamaecrista* (カワラケツメイ属)、*Senna* (センナ属) に分類しました。*Senna* は葉が4-20個の小葉からなり、種子が果実の長軸に対し、平行に並び、果実は開裂しないなどの特徴があり、ハブソウ (*S. occidentalis*) やエビスグサ (*S. obtusifolia*) などの薬草を含む約240種が世界の熱帯を中心に分布しています。

日本薬局方にはチエンネベリセンナ (*C. angustifolia*) とアレクサンドリアセンナ (*C. acutifolia*) の2種類が記載されています。チエンネベリセンナはアフリカ、アラビア原産の常緑小低木で、高さ1m前後、葉は互生し、偶数羽状複葉で有柄、托葉があります。小葉は4-10対、披針形で長さ2-3cm、左右非対称で全縁。総状花序を頂生し、黄色花を咲かせます。さや果は楕円形で扁平、やや鎌状に湾曲、中に8個の種子を内蔵し、開裂しません。主にインド半島南部のチエンネベリで栽培されることから名前が付けられました。イギリス、日本では主にこの種を使用しています。アレクサンドリアセンナはナイル川流域に自生し、小葉は3-9対、卵状披針形長さ1.5-3.5cm、花卉は淡黄色で赤色の脈が入ります。種子は6-7個。エジプト、スーダン、サハラ地方で栽培されています。欧米ではこの種を主に使います。両種とも栽培地から高温、乾燥、強い日射を好むことが分かります。最低気温15℃以上を必要とするとところから耐寒性がなく、国内では野外で越冬せず、単年性植物の栽培になります。また、湿潤で日照時間の短い日本での栽培は極めて困難です。

古代エジプトでは医学書『エーベルス・パピルス』(BC1552)に「排泄を促す 新鮮なナツメヤシ (*Phoenix dactylifera*)、下エジプトの塩、二枚貝を水と混ぜて皿に入れ、センナの粉末をさらに加えて煮て、壺に入れる。人肌程度に温めて食べ、甘いビールとともに飲みこむ」など数種類の下剤としての用い方が記されています。その用い方がエジプトからアラビアへ伝わったことは容易に想像されることで、アラビア語の *sanā* がセンナの語源になったという説があります。ラテン語の *sena*、16世紀には英語で *senna* となりました。ヨーロッパに伝わったのは11世紀になってからで、アラビアのカリフの侍医メシュー長老が伝えたと言われています。その後欧米諸国では汎用される下剤となりました。シェイクスピアの戯曲マクベスの中で、城へイングランド軍が攻めてきた時、マクベス王(在位1040-57)が「薬草のダイオウなりセンナなり他のどんな下剤を使ってもイギリス人たちをこの国からきれいに一掃してほしい」という有名な場面があります。よほど効き目の良い下剤であったようです。

日本への渡来はオランダからで、シーボルト(1823来日)が来日時に持ち込んだ薬品類の中に強下剤として旃那(センナ)の記録があります。後の『和蘭薬鏡』(1889)の大黃の項には「常に大黃を服すれば是に慣れて通利せず。久服するに随ひ逾く便閉を患ふ。此の症は患者の體稟に随ひ旃那葉、盧会等を用ひ、或いは大黃に白石礬を加へ用いれば能く通利す」と記されています。日本薬局方に瀉下薬として初版(1886)から収載されています。(村上守一 記)